飲ませないの？

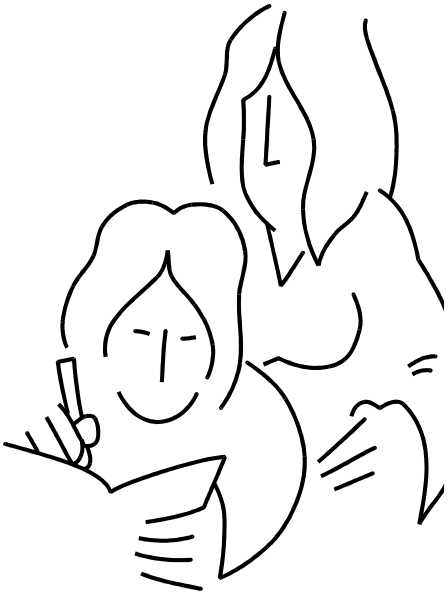
松本　康子

「母親自身が、自分自身の異文化体験をどのように理解するか」が、「アメリカでの子育て」の鍵！

アメリカへ来て早い時期に、自分自身の異文化体験をどのように理解するかが、「子育て」の鍵だ、という体験をしました。それは、授乳の間に「水を飲ませないの？」だったのです。

日本での赤ちゃん育て

長女が生まれた頃のことで、30年前の日本での話になりますが、夫は1ヶ月に100時間を越す残業時間もざらという超多忙な中にありました。夫の助けは全く当てに出来ないため、経験などゼロから始める私の育児は、実家や夫の両親からのアドバイスやサポートに頼ったものになりました。それこそ、おしめの素材からおもちゃの選び方から遊ばせ方など、いろいろな面で。それにもう一つ、「スポック博士の育児書」を参考までに読んだことでしょうか。人間の完成した形（？）とは程遠いような、3000グラム足らずの柔らかな赤ん坊を、そのアドバイスや育児書に書かれていたように身体が動いているか、また、反応しているかと、皆で観察しようと必死な目で見ていた、という育児で始まりました。



今でもはっきり記憶にありますが、3月のまだ寒い時期に生まれた長女が、風邪を引かないようにするためには、どのようにして暖を整えるかが育児の最優先でした。その当時の暖房器具といえば、どの家庭でも石油ストーブという時代でした。そんな時代での入浴にしても、部屋を暖めてからで始まり、赤ちゃん用のバスタブへ湯を張るために何度もバケツで運ぶ（排水も想像がつくでしょう？）という、何とも時間のかかる作業を常としました。また、全ての生活が、2～3時間おきの授乳時間の合間を見計らってすませていた、と言っても過言ではない気がします。

いろいろ思い出されますが、良い悪いは別にして、何も知らないところから始めていますので、経験者のアドバイスに対する育児法に、疑問を持つ暇も余裕もありません。私自身が、アドバイスに従っているつもりでも、「これでいいのかしら？」と、おっかなびっくりの状態だったのです。子どもにすれば良い迷惑で、アドバイザーと生徒である母親との間のコミュニケーション不足で、被害に会うこと度々でした。そうして、双方の親たちは昔ながらの育児を、私は私なりに得た新しい情報をもとに、貴重な経験を重ねていきました。長女に関する限り、日本の環境を無視した育児はあり得ませんし、また子どもをその環境に適するように育てるだけで、最初の1年くらいは精一杯でした。

アメリカでの赤ちゃん育て

アメリカ生まれの次女と三女の育児は、環境に適するように育てるというものとは少し違い、夫婦でその環境を作っていく育児だったように思います。それは、次女と三女を出産した同じ病院でのある経験が、アメリカという異文化での育児について考えさせられたからだと言えます。これから書くことは、私自身が実際に経験した医療に関する事で、アメリカのカルチャーを説明しやすい体験談です。

アメリカでの出産事情は、特に問題のない場合を除いて2日間で退院します。日本での7日間に比べると入院期間が短いのは、ほとんどの医療行為が保険でカバーされないため、入院費用が高いからでしょう。また、定期検診や2日間という短い入院期間を通じて、専門的な育児指導を受けた記憶がありません。私と同じ時期に、初めての出産を控えたアメリカ人の友人は、実家からの応援を考えていないようで、乳児を育てるのに大丈夫かしら？と、お節介でいらぬ心配をしたものです。どうするつもり？と聞くと、「旦那様と二人で協力して育てるから全く問題ない」という、